

成田光治『かつて女はカミだった』を拝読し

瀬川紀雄

二〇二四年三月に北方新社から刊行された本書は、山川学而先生主宰の文芸誌「瑠璃」(2001～17)に雲井光介の筆名で連載した表題作と『なつ子』の二編を選んでいる。「瑠璃」は某同人からご惠贈に与り二作とも結構拝読していたが、通読するのは初めてになる。

最初の『かつて女はカミだった』は、大学時代に出会った思い深い女性たちを描いている。主人公の姓はずっとあとになって現れ、「雲井」である。雲井は著者のペンネームである。敬意を抱いている本名の成田氏の名を用いて語るには恐れ多く萎縮しがちになるが、雲井なら率直に語れそうな気がする。筆名というものの効果、利点かもしれない。

以下、文中の紺色の文章は個人的な感慨、関連事項の陳述である。まずは幼少の頃の思い出であり、当作品の冒頭を成している。

「手をつないで隣のあっちゃんと幼稚園に通っていた。淡々しい思い出だから、どんな気持ちだったのか……一つだけ鮮やかなのは帰り道、ここを右に曲がれば確かにいつもの道と想ったのだが、丸顔でおかっぱ頭のあっちゃんは、もっと先だという。「そうじゃない」というのに、彼女はがんとして聞かない。幼い私は変だなと思いつつも彼女に付いていった、というより引っぱられていった。どこまで行っても目当ての角が見当たらないらしく、あっちゃんは立ちつくし、急に泣き出した

(覚えはないが、つられて私も泣いたようだ)。ちようどそばに交番があり、お巡りさんが二人出てきて、迷子となった私たちを背負い家まで送ってくれた。そのときの彼女の強情さと、それに従った私が好対照だったせいか、甘酸っぱい思い出として残っている。

一昨年、彼女の兄の葬儀で五十年ぶりぐらいに再会したが、彼女もそのことをよく覚えていた。………

どこかで読んだことのあるような内容である。交番を除けば誰しもが経験したことかもしれない。出だしだけで、何かしら文学史上の大作家の自叙伝作と同等なものを覚える。ふっと好きな作家である井上靖とシユティフターを思い出した。

あっちゃんの思い出をもうひとつ述べている。

「小学校四、五年ごろだろうか、ある冬のこと、屋根からの落雪がうずたかく積もった家の軒下を掘って、二人入れる広さのかまくらを造った。そしてごさを敷いてからあっちゃんを誘った。中で何をするわけでもないから、彼女も居づらくなったのだろう、ほどなく出ていってしまった。彼女と二人だけの雪中空間を思い描きつつせかせか掘ったかきもなく、夢はしゃぼん玉となってはじけたわけである。」

雪国に住んでいた少年なら誰しも経験したことかもしれない。沸き起こる情愛による営為。しかしそれが報われない。いや、束の間ともにいられただけでも十分なのかもしれない。これはもっと原初的にメスに対するオスの営為に通ずるものだろう。以下、本作はそれを基調に種々語られているとしても過言ではないだろう。

あつちゃんの後は、中学時代の鼓笛隊でリコーダーを吹いていた後輩、高校では雲井より成績がずっと良くカミにはなれなかったがそれに近いのだろう香川さん、大学時代の初めて恋文を書いたイタリアの女優に似た「モニカ嬢」という順序で序奏的に語る。

大学時代に出会った幾人かのカミと同時に、親友二人岩崎と沼田との交流についても詳細に語っている。雲井は中央の著名な私立のW大文学部美術科に在籍している。初めてのコンパが新宿で行われた時、雲井は特に、越後出の岩崎と上州出の沼田に地方の出であることと内向的な性格であることに共通性を見出す。そして「現代文学研究会」に入部しようとしたら、そこに岩崎もいた。しかし、肝心の文学について語らないその会から岩崎とともに足が遠のく。一方、沼田は美術館や画廊を巡り自ら絵を描き本も読んでいた。とにかく岩崎と沼田の三人はよく茶店で雑談を交わした。雑談は主に身の回りのことや熊谷守一などの美術、小林秀雄と関連の文学、当世の学生運動に関わる思想、クラシック音楽についてだろうと推測される。

ここで章区切りのように「※」印が置かれる。そして雲井は種々のアルバイトをしたことを語る。

その内容はまさに自分の学生時代のアルバイト観とまるで同様なので一節を引用する。

「大学一年から、なにごとくも経験とばかり、いろんなアルバイトに首を突っ込んだ。製本屋の手伝い、中元・歳暮の配達、ビル清掃、空港の駐車場係、デパート食堂の皿洗い、喫茶店のウェーター、中華料理店のドアボーイ、土木作業など挙げると切りがないほどある。社会体験が建前だが、少ない仕送りの補充も兼ね、大学には単位取得上、最低限出席

するだけで「生きた教材」の方を尊重した。いずれも臨時の仕事である。家庭教師や塾講師をしていた岩崎と比べると身分上は大違いで、職場では忍従あるのみ、地を這うような下からの目線になる。それでも職場をじっくり観察し、帰りには近辺を散策したりして見聞を広げた。」

私事だが、生家から通学可能ながら延二年間は街でアルバイトや間借り生活を送った私も同様な理由で種々のアルバイトをしたが、雲井の多種多様な広範さに改めて驚く。

モニカ嬢の次は、バイト先の社長令嬢である。

東京の郊外で小さな町の建設会社の事務のアルバイトの中、雲井はカミのまぼろしを見る。事務所の窓際で働いている社長の娘に対してである。美しい顔立ちの社長夫人に似ている。隣の社長宅で令嬢を含め経理の三人の女性が昼食をしている時、吉祥寺の花屋で買った深紅のバラの束を贈答する。彼女はあわてる様子もなく、バラを壺に入れて持ってくる。バイトの期限が切れた後、県境に近い団地の土木作業の手伝いを言われ、引き受ける。飯場での仕事は力仕事だった。そこで彼女への思いを募らせながら、一か月でバイトを終える。文末に電話する日時を書いて彼女に手紙を出す。その日時に電話したら、彼女と同じ課にいた若い男が出て、「いません」とつつけんどんな対応だった。粘り「いつ頃帰りますか」と尋ねると「あんた、どういうつもりなんですか」と邪慳な口ぶりに変わった。

ここは緊張感のある場面も多く、また先が気になり読ませる一つの短編になりそうな内容である。筆運びの巧みさを強く覚える。

雲井は気が沈みかけた時はよく散歩に出かけるが、その心情が伝わってくる。前述のことがあっただけに、次の景観および自然描写が美し

く、筋の進行上極めて効果的に覚える。

「冬になると東原は、夏の蒸し暑さや息苦しい排気ガスもどこへやらの、清浄に晴れわたる日が続く。四季の中では最も透明感があつて好きな季節になった。雪深い津軽にいたときの冬を厭う価値観は逆転した。

真冬の寒い夜明け、三鷹台の小高い丘から日の出とともに淡紅色に染まる富士山を遠望したことがある。それこそ、カチーンと澄みきった空か明るみはじめるとともに、裾は隠れているが、くつきりした台形の山容がピンクに色づくのは壮麗な美しさだった。手前の野原の一角に、茅葺きの農家を囲むように葉を落とした櫛の一群が見えた。朝日が昇るとともに、その枝々を抜けた光線が斜めに伸びて、庭先や農家の鄙びた白壁に帯状の模様を描いた。

櫛の林も好きだ。井の頭公園を南に抜けて玉川上水を渡った辺りに、幹や枝がひよろりと伸びて、リズムカルに踊っているような櫛林があった。ある春の目、その小道をたどると、葉脈の透けてみえる葉群れを通った目差しが、地面に細やかな模様をおとし、ふわふわ揺れている。武蔵野にはポプラ、シデ、ニレ、エゴノキもあるけれど、木肌、葉形や群れ具合などクセが強く、櫛と櫛にはかなわないと思ったものがある。」

最初の「冬になると、」の節は、後にも出てくる内容である。東京の冬は、日本海側の津軽と違って空気が乾きとても澄んでいるのだろう。体験したいものであるつくづく思った。そんな夜明け、富士山を遠望したいものである。手前の野原で農家を囲む櫛の裸木の一群。国木田独歩の随筆『武蔵野』を思い出す。その庭先や白壁に朝日が射し込み、帯

状の模様を描く。やはり美術科であることを思い出させてくれる。素晴らしい描写である。同時に、既に樹木の種類に詳しいことにも感嘆する。これも美術科ゆえだろうか。

私は東京の地理に疎く十分に読み取れないが、雲井は東京にいた十年間、吉祥寺周辺にいたようである。近くに井の頭公園もあるようだ。武蔵野には三鷹も含まれよう。中央線で隣駅である。どこかで井の頭公園も現れるが、太宰治については触れていないように覚える。

早稲田大学は一度だけ訪れたことがある。高校の級友Tさんがそこで哲学を学んでいた。彼に連れられて高田馬場駅で下り、大学前の古本屋をちよつと覗き、キャンパス内をすこし歩き、全学連の部室を案内された。部室の中には入らなかつたが、大隈重信の像辺りまで行つただろうか。ただただその広さと校舎の立派さに感嘆し。近くの茶店で何か食べただろうか。彼は狛江市にアパートを借りていて、小田急線の次々とすぐ続く踏切音に驚嘆しながら彼の部屋に案内された。そこに三泊ぐらいさせてもらった。多摩川沿いにも行き、大都会の中を流れる川が立派過ぎてびっくりしたものだ。早稲田大学だったか狛江市だったかで求人案内板でバイトを探し長居するつもりで、なんか鉄道路線の掃除をする夜のバイトをやったはずだが、風邪気味になり一日で終わったような気もする。上京のもう一つの目的「秋の音楽展」は聴けた。会場は東京芸術大学のホールだったろうか。著名な作曲たちの現代曲が初演され、演奏家にピアニストの高橋アキが登壇したり、演奏直後の作曲家が呼ばれて席のすぐ傍で高橋悠治が立ち上がって挨拶したり。東京文化会館に入って見た記憶だが、美術館を訪れただろうか。とにかく上野公園を主に上野駅近辺のデパートなどで十分時間をとられていた。Tさんに連れられたデパートで、後でちよつとした絵画展を見

に行った記憶もある。

雲井は東京という街をよく観察することを心掛け、散歩を好んでいる。学生時代のほんのわずかな滞在で、若い時に大都會を知ることには、その時間的な凝縮の中に数多くの事象・体験が詰れているということが理解される。

大学時代の最後のカミであろう真木と出会う。

真木が三年生の時、夜間の第二部から移って来た。郷里では見たことのない容貌である。鼻筋の通った整った顔立ちで、クールさを象徴する薄い唇、都会つ子らしい沈潜した顔の色だ。横山大観の「流燈」にいる女とそっくりである。三年の冬、奈良、京都へ美術科の研修旅行があり、京都で真木をお茶に誘った。

留年を覚悟していた四年の晩秋、真木から、入院中の親戚の人の輸血が必要になったと依頼がくる。雲井は血液型が合わないので他の三人に電話し確保した。岩崎と沼田、そして同じ大学にいた沼田の弟である。そこから真木を追いかけようになった。折よく、彼女が読んでみたいという本のことを思い出した。真木の家の住所を探り、その本を持参して訪れた。家のすぐそばの表通りに面した喫茶店に入る。以来、気が高ぶる日々が続く。ある日、三鷹駅の茶店に入る。熱いブラックコーヒーに、煙草が美味しい。ベートーヴェンのシンフォニーが、雲井の内面のざわめきと共鳴し、充実感が湧いてくる。高校以来クラシックに心が動く。

しかし、大学は学生会館の運営と学費値上げに対するアジ演説が騒がしくなっており、学内で真木を時に見かけるもの話すきっかけができない。真木を大学で見かけたある日、後に電話して吉祥寺の茶店で会う。一時間弱で店を出、散歩を促すも拒否される。電車と一緒に乗り

中野駅で見送る。もはや大学紛争が始まっており、創立者の銅像前の広場でデモ行進が行われ、スクラムの中に岩崎も混じっている。

意を決する思いで真木に電話し、真木が指定した四谷駅近くの茶店で会う。以前から付き合っている人がいると告げられる。とても尊敬している人という。別れた後、雲井は山小屋風な名曲喫茶でひたすら自分の内面と、響いてくる音楽に向き合う。店を出て裏町をほつつき歩く。

岩崎、沼田との三人組は留年となる。茶店では二階のスピーカーの真ん前が雲井の席だった。五年以上磨くことのない聴覚も次第に鋭くなってきた。落ち込み、かなしみの谷をさまよっている雲井は、音楽に癒される思いだった。

「あるとき、私はショーンソンの「詩曲」に聴き入っていた。こころの中を不安が黒雲のように行き来し、何かが起きそうな予感がした。私は背筋を伸ばし、音楽と一体化しようとした。バイオリンの弦音が波のようにうねり、高音から低音へ駆けおり、静かにたゆたったかと思うと、オーケストラとともにぐいぐい高揚していく。すると、率然として闇が裂け、音が奔流となって押し寄せてきた。嵐の海原に翻弄される帆船が見える。逆巻く波、風をはらんで傾く巨人的な帆が、まぼろしとなって躍った。音楽の内側に入り込んでしまったらしい。やがて圧倒的な幻視は消えてゆき、私は異次元の世界に放り出された感じになった。音の光線に照らされアタマの中がまぶしい、額が熱い……

この法悦とも思える状態は、雑多な想念の中央突破を図り、自分を無にしてこそ得られたものだ。音楽の扉が開く瞬間を体験したことが、未知の境界への旅立ちとなった。耳からの感動だけでなく、光と間の神秘的な狭間を垣間見たことで、私は何ものかに憑依されたのかもしれない

い。」

楽曲を音として集中して聴き、そこに深く内的イメージを創造し内なる情感を沸き立たせるよう音楽の接し方、そしてそれを言葉で表現する力量に感嘆する。本作は以後、音楽中心に語られていくとしても過言ではない。美術科の雲井である。なおさらに芸術看取に関し得意な分野なはずである。既にマラーに注目しているのも意外だった。

留年中、小さな業界紙を作る所で新聞配りや印刷屋への原稿届け、校正等の内容のバイトをする。そして都内のよりあちこちの名曲喫茶を訪れるようになる。その後、知人と共同出資して新聞販売店を経営した。そんな中、新たにモーツァルトを発見し、次いで決定的になったシヨパンを発見する。シヨパン音楽の旅が始まった。そして文学では、堀辰雄とシヨパンと響き合う詩心の立原道造、チエーホフ、改めて小林秀雄など。特に寺田虎彦は文庫本の随筆集を全巻読破する。

そんな状態でも、真木を時に夢見る。ある夜のこと、酒に酔った威勢で彼女の家の近くを徘徊したこともある。この時期、茶店で頭に浮かんでくる詩や文章をノートに記していた。音楽や風景から得た感動をだれにともなくことばの花束にして贈りたいと思うようになっていた。

本作は実に読み応えのある作品だった。著者の人間性を理解できるだけでなく、当時の学生、青年の生きざまを知る思いである。また、その後の著者を予想させる内容でもあった。

感想文なのに自分のことをも処々挿入したのは、著者と私の趣味・価値観・生き方が極めて類似しているためである。年齢は九年先輩だが、著者の時代の思潮や関心先の領域が、遅れてなお私は影響下にあるの

を自覚しており、再確認するためでもある。

次の作『なつ子』は、悠となつ子の物語である。都内の大学を卒業したばかりの悠の物語でもある。以下に物語の筋道を述べる。

著者そのものである主人公の悠は、東京郊外のK市にある新聞社で臨時雇用として働いている。退社後、新宿の歌舞伎町への行き返りにいつも中野駅近くのバーが気になっていた。

ある真夏の夕暮れ、店の扉が開いていて若い女が目に入った。そしてついにその店を訪れる。若い女は「なつ子」と言った。その後一週間おきに二度訪れる。五年前に病気で亡くなった彼女の父が津軽出身であることを知る。なつ子は二十二歳で結婚するまでW大学そばの鶴巻町に住んでいた。二人が知っている場所も多くなります意気投合している。

なつ子は音楽大学のピアノ科にいた時、二年上の先輩と結婚したが子どもができたため中退。その後、夫の浮気で離婚する。鶴巻町にいた頃、両親は近くで学生向きの喫茶店を開いていた。BGMにクラシックを流していた。

悠はなつ子を茶店に誘う。中野にある山小屋風な「ノクターン」である。悠はルビンシュタイン演奏の夜想曲第二集をリクエストする。なつ子は自分も弾けると言う。

なつ子は店から歩いて十五分ほどの新井薬師に住んでいた。母と同居し、小学四年の男の子を学校に送り出した後、ピアノを弾いたりしていた。土日には近所の子どもたちにピアノを教えていた。なつ子の夢はピアノ教室か母と喫茶店を開くことだった。バーの勤めはまだ一年足らずだった。

悠は一年足らずで突然解雇される。正月は弘前で過ごすことを告げ、なつ子にたまに青森の実家に帰ればと促す。父の弟が青森の繁華街にケーキ店を開いて繁盛しているらしい、となつ子は応えた。

悠は実家で正月を過ごす。実家の二階は大学教授と学生三人が住む下宿屋である。なつ子に電話して青森で会う。洋菓子店で繁盛している父の弟が弘前に支店を出したいという。なつ子に手伝って欲しいと。なつ子は弘前のお店の現状を知りたくなり、翌日二人は弘前で会う。悠はよくいく二階にピアノがある名曲喫茶を紹介する。次に洋菓子を置いている「フランス亭」に。

弘前の名曲喫茶というのは名曲喫茶「ひまわり」であろう。悠は高校時代から通っていたのかもしれない。私は大学時代によくリクエストに訪れた店であり、ママさんやバイトの女子大生に優しくして頂き、音楽を学び、また私の幾人かのカミと訪れた思い出深い店である。悠は後ここで街の著名な女性詩人の表敬朗読会も企画し、拝聴に訪れたことがある。現在、「ひまわり」は息子さんが引継ぎ、ママさんも健在である。

とにかく、悠、いや著者がクラシック音楽に極めて造詣が深いことに感嘆しながら本作を読み進めていた。

東京に戻った悠は出版社の臨時職員となる。退社後決まって名曲喫茶に寄る。そして久々に大学の親友である岩崎と沼田に会う。

岩崎は一年留年した後、大学院に進み大学紛争の渦中にあがく。かねてからマルクス、サルトルに傾倒し、先頭集団にかかわったため中退。その後、塾講師をしながら自活。運動から足を洗い結婚。財閥系美術館

の学芸員となる。沼田も留年していたが退学し、都内の美術研究所に通い油彩画を続けていた。

なつ子は支店を開く腹を決めていた。母も賛成だった。東京で店を持つのは難しい。悠と二人で東京の甘味所を見学する。そしてなつ子が育った鶴巻町とともに訪れる。なつ子が子どもの頃、友達とよく遊びに来たという小高い丘があつて、そこは悠にとつても好きな散歩コースのひとつだった。丘の上に教会があり、十字架をいただいた尖塔が異国情緒をかもし出している。丘から西方の高台に女子高校のグラウンドあり生徒たちがバレーボールに興じている。なつ子の高校である。二人はその情景に同じイメージを重ねる。なつ子が手を伸ばし悠の手を握った。

こころ温かくなる、そして希望をもたらせてくれるとても美しい作品である。私はあまり昨今の短編を読んではないので何とも言えないが、理想的な短編、佳品ではなからうか。短編映画になりそうに思われてくる。こういう作品に出会うと、文学を若い人たちにも勧めたいくなる。

同時に、悠は『かつて女はカミだった』の主人公・雲井のその後として誰しも拝読するだろう。著者の大学卒業後の東京時代を知ることができ、興味津々にページをめくっては著者の勉学と高尚な趣味嗜好、そして多様な経験の中、それらを生かし徐々に活字世界に焦点が絞られてつづあることも了解されてくる。弘前にもどって新聞記者になる運命なのだろうと。そこでやがて文化部長、論説室長となる。愚生ごときも成田氏にお世話になり深謝の限りである。街のコンサートでも時々お会いすることができた。

著者は『つがる文化は今』三巻、詩集『雲の美術館』を上梓し、二〇〇三年から青森のタウン誌「北の街」に「コラム・東西南北」を十五年八か月連載、二〇〇五年から企画集団ぷりずむ発行の情報誌「津軽学」に二〇一八年まで執筆している。なお、二〇〇五年から十一年まで弘前学院大学大学院臨時講師として地域メディア特講を担当している。

弘前の、いや津軽の代表的な著述家、文化人であることはいうまでもない。

2025.3.3